

# 樋口一葉と徒然草

—— 初期の日記と習作を中心に ——

島内裕子<sup>\*1)</sup>

## Higuchi Ichiyoh and *Tsurezuregusa*

— Especially on Ichiyoh's early diaries and writings —

Yuko SHIMAUCHI

### ABSTRACT

Higuchi Ichiyoh was a famous woman of letters in the Meiji period. She wrote many diaries in her short life of twenty-five years. In her diaries, she wrote not only about her daily life, but also her thoughts inspired from reading books such as *Makura-no-sohshi*, *Genji-monogatari*. Classical literature in the Heian period plays an important part in Ichiyoh's literature, because she studied at *Hagi-no-ya*, a private school of Nakajima Utako. In her school, many high-society women studied the Japanese poem, Waka, and classical literature. Ichiyoh wrote of occurrences in *Hagi-no-ya* using citations from classical literature.

Ichiyoh also cited *Tsurezuregusa*, a medieval essay written by *Kenkoh-hohshi*, in her diaries. For Ichiyoh, *Tsurezuregusa* was her desktop book. She was able to write many of her thoughts and feelings by attentive reading of *Tsurezuregusa*. This paper aims to point out the influence of *Tsurezuregusa* on Ichiyoh.

### 1. はじめに

明治26年3月21日、本郷菊坂町69番地の樋口一葉の家を、ひとりの見知らぬ青年が訪ねてきた。彼は雑誌『文學界』の編集に携わっている平田禿木だった。彼は一葉の小説『雪の日』が、『文學界』第3号に掲載されることを伝えにやって来たのだった。一葉と禿木は初対面にもかかわらず、文学のことや近況を話題に、互いに共感し合うところが多かった。禿木は、当時高等中学の学生であったが、学校にも友人たちにも馴染めずに、孤独な思索の日々を送っていた。そのような禿木にとって心の慰めは、徒然草だった。すでに彼は『文學界』第1号（明治26年1月31日発行）に評論『吉田兼好』を発表している。一葉

---

\* 1) 放送大学助教授（人間の探究）

はこの同年の21歳の文学青年との語らいの中から、それ以前には得ることのできなかったさまざまな文学的感興を得、さらに禿木を通して『文學界』の他の文学者との交際も始まり、『大つごもり』『たけくらべ』などの作品の発表の場を得ることにもなった。

このようなことを考えれば、樋口一葉にとって異性の文学者としては、まず第一に半井桃水が重要な存在であることは言うまでもないが、一葉晩年の文学的開花に対して直接のきっかけを作ったのは平田禿木であった、と言っても過言ではないだろう。その禿木との出会いが、最初から互いに強い精神的共感の上に築かれたことは、一葉にとって大きな幸運であったと言えよう。そして、そのような二人の間の親近感が、徒然草を媒介としていた点に、わたしは大きな興味を抱くのである。

平田禿木の『吉田兼好』は、江戸時代に主流を占めていたような、兼好を「粹法師」として捉える見方を離れ、人生に煩悶する人間として捉えている点が画期的である。もちろんそのような兼好観は、禿木自身の人間性が色濃く出ており、かなり主観的なものとなっているが、それまでの兼好像に束縛されない、個性的な評論となっている。

禿木の『吉田兼好』を読み、深く共鳴した一葉は、この共感をさらに他人と分かち合うべく、歌塾「萩の舎」の先輩で、女流小説家として当時有名だった田辺花圃にこの話題を持ち出す。ところが、意外なことに花圃はきわめて冷淡な反応しか示さなかった。

つれづれの法師を慕ふ人のかしき事どもさまざま語りたるが中に、みづからが心にもげにと覺ゆるふしすくなからず。一日歌よむ友のもとにこのものがたり引出ぬ。さるは風流の極まり幽玄の趣きをこの人々こそ知り居たらめとてなりし。あやしうあざみ笑ひて、「かの人ほどの口わるは又あらじかし」と、只一言いひけるはいかなるにか。いとあやしかりし。<sup>1)</sup>  
(明治26年の雑記より)

一葉と禿木がそれぞれ独自に心の中で育ててきた徒然草観は一致していた。しかし、一葉たちの徒然草観は、第三者のそれとは異質のものだったということが、この雑記の断片から鮮やかに照らし出されているのである。

以上のようなエピソードからもわかるように、一葉と徒然草のかかわりには、特別な意味があると考えられる。そこで、本稿では時間を遡って、一葉における徒然草への関心がいつごろから起こり、徒然草が一葉の日記や作品の中にどのように反映しているかを、具体的にみてゆきたい。

## 2. 『身のふる衣 まきのいち』の構想と表現

樋口一葉の最初の日記『身のふる衣 まきのいち』には、「萩の舎」での一葉の姿が生き生きと描かれている。この日記が16歳の少女によって書かれたことを忘れさせるほどすでに文学作品とさえ呼びうる達成度を示しており、その後の彼女の文学的軌跡の出発点にふさわしいものとなっている。一葉と徒然草の関係を考察するにあたって、まず最初の日記の中に徒然草の影響の痕跡があるかどうか、ということから始めたい。

『身のふる衣 まきのいち』は、明治20年1月15日から8月25日までの約7ヶ月間の日記である。しかしこの日記は、毎日の記録ではなく、特に書くべきことのあった日だけ書いている。書かれている日付を示せば次のようになる。1月15日・1月22日・1月29日・

2月5日・2月12日・2月19日・2月21日・2月26日・3月5日・4月16日・4月23日・8月25日。以上が日記の書かれている日である。このようにこの日記にはかなりの粗密があり、全体を一読すればすぐに、一葉にとってきわめて重要なふたつの出来事を中心に書かれていることがわかる。すなわち2月21日の「萩の舎」発会と4月16日の小石川植物園散策である。「萩の舎」発会前後の記述に関しては、美しい衣装を話題とする他の上流令嬢たちの華やかに浮き立つ様子と、古びた着物で参加せざるを得ない一葉との対照<sup>2)</sup>や、それにもかかわらず身分的・経済的劣勢を、一葉が和歌で最高点を取ることによって挽回したというきわめて劇的な場面が描かれている<sup>3)</sup>ことから、特に注目されてきた。ただし、これらの記述の中には徒然草からの引用はみられず、また間接的にも徒然草を彷彿させるような場面も見あたらない。しかし、4月16日の記述になると徒然草との関係を考える上で重要な場面が出てくるので、この日の日記の全文を次に引用してみよう。なお、便宜上(A)から(D)の4段落に分けて、順に内容と表現を考えたい。

- (A) 前月十六日の頃、空のどか成るよりつどひぬ。歌など三つふたつ終りて、師の君の、「いでや夜の間嵐の覚束なきに、あたり近きうゑ物、みその、桜みはやさん、いかにぞ」と、の給へば、「そはいとうれしからんかし」など、おのがじし言ひ合て立出侍りしが、常の道を行ば迂廻にて又興少なからん、此の寺一ツくゞり抜なばいと近けれ、と、道はいと悪しと覚えはべれど、やがて道むさぼりて赴ぬ。
- (B) げにやいといと草は深く、石の塔など打ちみだれたると哀也。そが後にめぐりてみれば、しの竹小笹など間なく生茂りて、道ふみ分ん方もなし。はるかにみ渡せば四方の山の端あいたいとして霞棚引き、近き小山田には里のうなひの若菜つむに、いとゞ飽所なけれど、此難所こえがたくて人皆おはす。師の君いち早く道とめて折給ふに、おのれもおくれじやと飛下りしに、「あなめづら、一の谷のむかし思ふ、よ」と、どよみ給へり。何といふあたりにか有けん、小き川に丸木橋など打渡したる処、からふじて渡り侍りぬ。なみなみの人ならんにはいとたやすき処なめれど、例の室の外さへ知り給はぬ君達には、道理ぞかし。
- (C) やがて行侍れど、ここにはさしてめづらしきこともなし。風流めきたることはなくて、この枝かの枝など折々給ふに、「あなけふとや、常ならぬみそのものを。まして男子ならぬ身の」と、かたはらいたかりしが、「いでやまかでん。こ度ぞいづれの方より」と、師のの給ふに、「いかにおはします、妾はひよどりごえをこそ好まほしけれ」など、打ゑみつゝ言へば、人皆も「それ宜かめれ」と、いひひして行に、しかなれにし物か、行迷ひもせざりし。
- (D) 道すがら、「今日のゑものはいかに」など聞へかはして帰りぬ。皆かの枝ども情なふ折なしたるを取分てほりかにかの給ふを、一人引退きて見て有りしに、「君はいかに」と、の給へば、「などかおろかなる身の手折らんには、花もさこそ口惜しかめれば、控へ侍りぬ。されど一人もれ侍らんも口惜ければ、かえでのめばえ一本、岩のはざまに生侍れば、かくて有らば日の影をもしらでやはてん、といとおしさに、是なん抜もて参り侍りぬ。賤が庭にうつし植て、みその、名残とめて侍らん」と、申出れば、師の君の、「いとうとうと敷枝ならねどなべての花をみればいつもわらは心に成て」など聞へ給ふ。

まず(A)の部分。冒頭に「前月十六日の頃」とあることから、この日記が、その日付当日あるいはせいぜい翌日に書かれるという一般的な日記の書き方と異なり、かなり日数が経ってから書かれていることが分かる。一葉はある時点で、この日のことを記憶によって書いた。そこでは当然、単なる事実の記録を越えて、何らかの表現意欲の表明となる書き方がなされているであろう。わたしは、おそらくここで一葉は、去る2月21日の「萩の舎」発会と一対をなす内容を書こうとしていると思う。その具体的な記述は(B)の部分に顕著に見られるので、そこで触れる。書き出しのこの段落では、「萩の舎」での歌会が終わった後で、「師の君」すなわち中島歌子が、弟子たちに近くにある東京帝国大学付属植物園の散策を提案し、弟子たちも喜んで賛成する場面から始まる。折しも4月半ばであり、桜の見頃であった。地図で見ると、安藤坂にあった「萩の舎」と伝通院と植物園の東端がほぼ一直線に並んでおり、その距離約1キロ。伝通院はちょうど真ん中あたりに位置する。普通の道に沿って行ったのでは遠回りになるから「此の寺」(伝通院)を通り抜けて行こうと言ったのが誰であるかは直接には書かれていないが、(B)を読むと、この近道の提案者も中島歌子であったろうと推測される。(A)は、「萩の舎」の主宰者中島歌子のリーダーシップとそこに集う女弟子たちの華やいだ雰囲気の中に、荒廃した寺院を通り抜けるというやや不気味な予兆を点綴して巧みな導入部を形成している。

(B)の部分には、いよいよ道なき道を分け入って伝通院を通過する様子が書かれている。女弟子たちの立ち往生を余所目に、当時47歳の歌子がみずから、「いち早く道もとめて」突き進んで行く姿には、水戸藩士林忠左衛門未亡人の気丈さが描き取られている。その歌子の果敢さに触発されるようにして一葉が、「おのれおくれじやと飛下り」と、他の弟子たちは皆一様に歓声を挙げる。小川に懸った「丸木橋」も、「例の室の外さへ知り給はぬ君達には」、渡ることさえ容易ではない。この段落には、歌子と一葉の活発な行動力が印象的に描かれると同時に、この二人以外の深窓の令嬢たちの、彼女らの育ち方ゆえの限界性が対照される。このあたりを描く一葉の脳裏には、「萩の舎」発会における令嬢たちの晴れ着の豪華さに圧倒されながらも、和歌で最高点を取ることでかろうじて自己の精神のバランスを保った自分自身が、一步屋外へ出るや、今度は最初から優位に立ちうる場面があるということが横切ったはずである。そのような情景を記述することによって一葉が、再度の自己回復を図っていることが読み取れるのである。なおここで「丸木橋」という表現が使用されていることに注意しておきたい。この言葉は、『にぎりえ』でヒロインお力が、「しかたがないやつぱり私も丸木橋をば渡らずばなるまい」という表現と遠く響き合うからである。

(C)では、(B)に見られた一葉の優位性を支えとして、他の人々の心ない行為への批判が書かれる。小石川植物園に到着した彼女らは、とりどりに桜の枝を手折って平然としている。それを見た一葉は彼女らの行為を、興醒めであきれたものとして心の中で鋭く批判する。その後、帰り道はどうしようか、遠回りでもちゃんとした道を帰ろうか、あるいはまた往路のように伝通院を通り抜けようか、という歌子の問いに、一葉がすかさず、「ひよどりごえをこそ好まほしけれ」と答えて、他の人々も賛成し、往きで馴れていたせいか今度は皆もうまく通ることができたことを記し、ここでも一葉の際だった姿が描かれている。

(D)では、帰路、人々がさきほど手折ってきた桜の枝を自慢気に見せ合うシーンから書かれる。しかし、一葉だけは人々の話の輪から、意識的に自分を遠ざけている。そのような一葉の精神的違和感に全く気付かず、「あなたはどんな花を取ってきたの」と無邪気に尋ねられ、一葉は、その場に居合わせた人々が思いもよらぬ発言をするのである。「あなたがたのような美しく身分も高いお嬢様たちに手折られるのならよいでしょうが、わたしのよう者に手折られたのでは、花もきっと口惜しいでしょう。ですからわたしは花を折って持ち帰りませんでした。けれどもやはりそれでは寂しいので、日光が良く当たらない岩の間に生えていた楓の若木を引き抜いてきました。それを庭に植えて今日のこの日の記念にします。」簡潔に書かれている一葉の発言を、言葉を補って述べればこのようになろう。ここには、身分や経済力の有無とは無縁に、天性の高い精神性を備えた一葉の姿と、悪気はないにしてもいかにも軽薄な他の人々との対比がくっきりと浮かび上がっている。一葉の発言を聞いて歌子さえ、「花を見るとつい子供に戻ってしまっ」と弁解がましく自己の行動を反省している。このような歌子の言葉を最後に記すことによって、一葉はここで、師よりもさらに遠い精神の地平に、無意識のうちに旅立っているのである。日陰の楓の若木とは一葉自身の姿にほかならない。このままでは空しく朽ち果ててしまうであろう楓の若木を手ずから抜き取って、明るい日光の下に植え換えたように、一葉は言葉の力によってみずから、世間の日の光の中に自立させようとしているのである。

『身のふる衣 まきのいち』において、従来最も重要視されてきたのは2月21日前後の「萩の舎」発会の記述である。しかし、そこでは晴れ着をめぐるいわば外見的なものが中心をなしており、一葉と他の人々との精神的な深淺さの対比の鮮やかさは、むしろこの植物園散策の記事に明確に描かれている。「萩の舎」発会の日記を書くという執筆行為を経て、一葉の筆はより深い洞察と表現力を獲得したと考えたい。

以上が植物園散策の日記に描かれている内容に対するわたしの考察であるが、これを踏まえて、徒然草との関連について最後に述べたい。結論から記せば、まだこの時点では、一葉は、徒然草に対してそれほど深い理解は持っていないであろうということである。なぜかといえば、もし徒然草を注意深く読んでいたとしたら、(C)と(D)に描かれている人々が桜の花を傍若無人に手折るシーンで、必ずや徒然草第137段を引用したと思うからである。「よき人はひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こく、よろづはもて興ずれ。花の本にはねぢより、立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづの物、よそながら見ることなし。」徒然草にこのように活写されている人々の態度は、そのままこの日の「萩の舎」の人々の姿である。これほど類似した場面であるにもかかわらず、徒然草への言及が見られないのは不思議である。後年の日記の中では、日常のささいなことに対しても徒然草を話題として引用していることを考え合わせれば、やはり、この時点では一葉はまだ、徒然草を自在に引用するほど読み込んでいないと結論せざるをえない。しかし、このことは決して一葉の文学的未熟さを意味するものではない。当時の一葉の16歳という年齢を加味すればむしろ当然のことである。それよりもここで注目しておきたいのは、この日の一葉の姿が、兼好の賞賛してやまぬ「よき人」そのものであることである。徒然草に書き留められた兼好の価

値観と、一葉の本来持って生まれた聡明さはすでにこのような早い時期において、一致している。そのことこそが、以後の一葉の作品の中で、徒然草の占める位置が次第に大きくなり、一葉自身も徒然草に強い共感を持つ遠因となるのである。

### 3. 一葉の初期の習作と徒然草

前節で見たように、一葉の最初の日記『身のふる衣 まきのいち』においては、徒然草の明確な引用は見出せなかった。その後一葉の日記としては、父樋口則義の病没から次兄虎之助と同居するまでを書いたもの（明治22年7月12日から9月4日）、および明治23年1月16日から3月14日までを書いたものがあるが、どちらも断片的なものに過ぎない。これら日記の中には徒然草は引用されていないが、3月14日の記事の後に日付なしで書き込まれている文章は明らかに徒然草によって書かれている。ただし、これについては後述することとして、今は、『身のふる衣 まきのいち』とほぼ同じ時期から父の死以前まで、すなわち明治20年春から明治22年夏までの間に書かれた一葉の文章を概観し、その中に徒然草との関連箇所があるかどうかを探してみよう。

#### (1) 明治20年春の断片（無題なので、ここで仮に「春の山里」と名付ける）

この文章には、徒然草の表現と類似した部分が冒頭近くにある。

夜もすがらふりたる春雨は名残なふ、一日今日は空はれ渡りて、ちりほどの雲も残らぬ朝のさま、たとしへなくのどけきに、垣根の草はいといと青々とみえ渡り、軒ばの柳のふくだみたるなど、すべて春のけしきと、のひたるもいとおかし。

下線を付した表現は、徒然草第19段の「鳥の声などもことのほかに春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌え出づるころより、や、春深く霞わたりて」というあたりを念頭に置いているように思われる。この「春の山里」は、一葉が郊外に引っ越した友人を訪ねた時のことを書いた短文で、擬古文で書かれており、徒然草や枕草子などに描かれている都の近郊の散策の情景を模倣しているが、まだ一葉らしい個性は感じられない。

上記の部分が明確な徒然草の引用かどうかは断言できない。これと同時期に書かれた『身のふる衣 まきのいち』の中には、前述したように徒然草享受が見られないので、偶然の一致かもしれない。しかし、徒然草第19段はとりわけ有名な章段なので、この程度は自然に引用できたのかもしれない。

#### (2) 明治21年春から夏の作文3編

- ① 「春山ざとをとふ」
- ② 「月夜に梅を尋て」
- ③ 「納涼」

これらの3編の作文はいずれも「萩の舎」における和文修行として書かれたものであろう。全80葉からなる雑記帳の2丁表から7丁表までに記されており、自分自身の作文以外に、田邊龍子（後の三宅花圃）や田中みの子など友人たちの作文も5編、一葉は書き写している。これらの8編の作文はどれも典型的で、この中から一葉のみが、後世まで文学者として残ってゆくことを推測するのは難しい。試みにこれら8編の冒頭の一文を次に示してみよう。

## 春山ざとをとふ (①)

樋口夏子

空にみだるゝ糸のかけなどほのかにみえて霞渡れるに、心も棚引れ出ぬべき今日のさまになん。

## 月夜に梅を尋て

乙骨まき

門の柳もほのかにみえて、くもりもはてぬ朧月よのけしき、いひしらずなつかしきに、いづこなるらむ折々琴のねの聞ゆるも心にくゝ、かゝるよをいたづらにねて明さんも口をしくて、近きわたりの梅さきつと聞え、いかで今宵は尋ねてんとたゞ一人やどを立出て、そこはかたなくたどり行程にとある林に来にけり。

## 同上

片山てる

学のみどりのともし火はいとあかけれど、さゝがにの横文字読まんはいとむづかしくて、うむにはあらねどさしおきぬ。

## 同上

田邊龍子

まゆごもりたる柳の枝に、夕月のおぼつかなげにかゝれる様いとおかしきに、待つる梅も咲けんかすと、まづ岡への林に至れば、いつか三ツ四ツ咲きそめてかほりえもいはず。

## 同上 (②)

樋口夏子

あし垣のもとには、昨日まで消残りたる雪もみえしを、さすがに月のかけなど霞とはなけれど、寒からぬ程に成ぬ。

## 納涼

田中みの子

たへがたかりし暑さもやうやうさりぬる夕暮れのほど、打ち水したる庭の、いと涼しげなれば、やをら立出てそこはかともみぐるに、垣ねに咲しあぢさゐの水にぬれたるが、まだ打しほれて露待げなるもなまめかしうやうやう暗く成行ほど、庭のはちすに吹渡る風のかぐはしう匂ひくるなど、似る物なうおぼゆ。

## 同上

伊東夏子

昼顔の花は残りなくしほみて、月はまがきにさし出たり。

## 同上 (③)

樋口夏子

かしましかりし蟬の音もいつしか絶て、軒ばの竹のさらさらと打ちそよぐも、いと心地よし。

①は、(1)で引用した最初期の習作とやや似た内容で、友人たちと郊外に出かけた時のことを書いたものである。(1)と比べて文章表現の流れが巧みになっているように感じられるが、この①には徒然草との関わりは全く見出せない。むしろ一葉は枕草子をかなり意識して書いているようである。桜がもう咲いたかまだか、というたわいない議論をしていた一葉たちが、実際にそれを確かめようと連れだつて郊外に出かけていくことを描いたこの作文は、まるで王朝時代の女房たちの生活の一コマのようであり、現代のわたしたちから見れば、17歳の少女がよくこれだけの擬古文を書くことができたと驚かされるが、②や③のように他の人の文章も並べて書いているものを読み合わせてみると、一葉だけが格段に表現力があつたということではなく、当時の女性たちの平均的な教養がこのようのものであつたことがわかる。②は、家の近所の梅の香りを賞賛した作文。③は、夏の夜に庭で友人たちと語らう情景を描いた作文。2編とも徒然草との関連は見られない。これらの8編は、

どれも枕草子の影響が顕著であり、「萩の舎」に集う女性たちは、自分たちを平安時代の文学サロンの住人のように擬しており、そのようなことから自然に枕草子をお手本にしたり、あるいは積極的に枕草子的な文章を書く指導を受けていたのであろう。

このように、出発点では他の人々とほとんど区別ができないような文章を書いていた一葉が、どのような軌跡を描いて優れた文学者となっていったのだろうか。この興味深い問題を考えるにあたって、徒然草享受が一葉の文学的成熟にとって、ひとつの触媒となっているのではないかと考えられるので、一葉が書き残した次なる執筆断片をみてゆこう。

### (3) 明治22年初春の雑記

(2)の雑記帳39丁表から41丁表までに連続して書かれた6つの断片はどれも徒然草と密接な関係がある重要なものである。以下に私意に番号を付して引用しよう。

- ① つれづれならぬ身は、日ぐらし硯にもむかはず、おのがつとめらうがはしく走りめぐりて、日もやうやう暮ぬとて足机など取出しつゝ
- ② 雨
- ③ 春雨のふる夜など人しづまりて後、ひとり燈火のもとにふみくりひろげて、いにしへの世も、人のさまも今に思ひくらべたるこそ、あやしくひとつくにとも思はれず、篇にへんつきつぎをぞしらまほしけれ。物の初は春といひけんも、今の世にては冬ならばをかし。歌などの題にも新年の何々といふも、新玉の春とかやいにしへはいひしを、新玉のとしとのみいふがわびし。されどさすがに年の立たる日は、あしたこそなる物なふをかしけれ。軒ごとに松立て渡して、ことにいかのぼりの声こそいさましけれ。ほぎごとといふ人のかなたこなた行かふみるもをかし。
- ④ 雨などしめやかにふる夜、人しづまりて後、ひとり燈火のもとにふみくりひろげていにしへの世の様、人のさまなど、今のよに思ひくらぶるに、あやしくひとつくにともおもほえぬことこそ多けれ。
- ⑤ 年たつ日のさまこそ、なる物なうをかし。これのみはさもかはらざりけり。まだ明はてぬほどに衣にくゝまりてふしたるに、大路行人のあし音の門
- ⑥ 朝(軒か)ごとに松たて渡して、大路のさまもあらたまりて、ことぶきいふ人のかなたこなた行かふもいそがはしげながらのどかなり。いかのぼりこそいさましき物なれ。おの子ならましかば、と時々思はるゝや。日もやうやう暮行ば、燈火のもとに男をうなうちつどひて、日頃は物むづかしく思ひ居たる人も、打やはらぎて物などいひ、親しみの始となれるはいと嬉し。すご六もよし。すべてすべて勝負ある物をかし。一日二日重なる程に、かくかくなしたりなどいふ日はなくて、此月も過ぬ。二月になりてやうやう日々のつとめもするころには成ぬ。春も此月よりはきぬる。いにしへは一月より春とかいひしが、あらたまりてはいと便なき事多し。歌の題にも、新年といふ事と春といふことのはなれたる、いと便なし。三月に成てぞ梅は咲ける。近くは亀井戸・小村井・蒲田・杉田其外いと多し。

この①から⑥までの断片は、それぞれ重複する表現も多く、一葉が、ある程度まとまった随筆的なものを書こうとして、試行錯誤を繰り返しながら、執筆を進めている様子がよく分かり、興味深い。相互の関連、および徒然草との関係、さらにはそれぞれの文章の意義などに注意しながら、順次みてゆきたい。

①は、徒然草序段のパロディと言ってもよい書き方がなされている。兼好は、時間の余裕の中からあのような徒然草を生み出したが、自分は日々の雑事の忙しさに追われて、とても一日中机に向かうことはできず、ようやく夜になってはじめて自分の時間が持てるのだ、という意味のことが書かれている。この断片は、文章の途中で中断されており、この後にどのような内容の文章を書こうとしたかは不明だが、一葉が自由に自分の日常の感想を書き留めた最初期に属する断片であり、そこに徒然草の序段が使われている点に、徒然草の影響の強さが感じられる。この雑記帳は、まず(2)で示した「萩の舎」での作文記録から始まり、4枚白紙の後、12丁表から38丁表までには、明治21年8月23・24・25・26・28日付の『郵便報知新聞』に連載された池袋清風著『和歌の略史』を、書写している。したがって①から⑥までの文章は、この雑記帳において一葉が、みずからの自由な発想と観察と心情に沿って書いた初めてのものと言ってもよく、そのような執筆の場では、「萩の舎」での作文が枕草子的だったのと異なり、徒然草的な発想や表現になっていることが注目される。すなわち、おそらく一葉は、「萩の舎」での自分の姿と自宅での自分の姿に、連続性ではなく、ある種の断絶を感じており、それが、文章の中に自然と現れているのであろう。

②はただ一字、「雨」と書かれているだけであり、これが何を意味するのか、この後に何か文章を続けようとしたのか、あるいは題名として書いたのか不明であるが、敢えて①との関連を考えるならば、「つれづれ」という言葉自体が、本来、雨と密接な連想を持つ言葉であるところから、一葉の心の中でも、①の後に、自然と雨という言葉が紡ぎ出されたのかもしれない<sup>4)</sup>。

③から⑥までの断片は、互いにはほとんど分ち難く結び付いている。これらを読んでゆくと、一葉の心の中でどのようなことが湧き上がり、それが表現に定着してゆくのかという様子や、表現が定着することによって、最初の文章の構想がどのように変化して形を整え、内容も整理されて、あるまとまりを持った作品としてその全貌を現すのか、ということが如実に示されている。

まず、③は3つの部分からなる。冒頭のやや長い一文は、②の「雨」という言葉と直接関係する「春雨」という言葉から書き出されているが、それに続けて「ひとり燈火のもとにふみくりひろげて」と書いているのは、明らかに徒然草第13段を念頭に置いている。しかし、書かれている内容は徒然草とは逆に、過去と現在の大きな違いを問題にしたものである。一葉が意識的に徒然草を逆転させて書いたのか、それとも率直な自分の感想として書いたのかは決められないが、①でも徒然草序段と全く逆の状況を書いていたことを見ると、一葉は、徒然草を大いに参考にすべき書物としながらも、そのような規範を踏まえることによってかえって自分自身の考えが明確になり、たとえ徒然草とは結果的に逆の内容になったとしても、自分の感じたままを書くことが可能となったのではないかと思われる。

③の第2・第3文は、冒頭部分を受けて、過去と現在で感覚が違ってきていることを、和歌の題を例にとりて書いている。この部分は、「萩の舎」で和歌を学んでいる一葉ならではの実感に基づいて書かれている。すなわち、旧暦では新年が春だったが、新暦になってからはまだ季節としては新年は冬であり、和歌のきまりと現実とずれができていたことを一葉は問題にしているのである。これは一見なんでもない指摘のようであるが、一葉が

文学の世界と現実の世界の相違に気付きはじめたこととしてとらえるならば、このような鋭敏な感覚をバネとして、後年独自の新たな文学世界を築き上げた原点を見る思いがするのである。

③の最後の部分は、直前の新年のことから触発されて、元旦の様子が描かれる。ここで一葉は、③のそれまでの内容から大きく転換した話題に筆を進めようとしながら、すぐに一旦区切りをつけてしまう。なぜなら、自分がこれから書こうとすることが、この一連の文章の冒頭部、および中間部からかなり逸脱した内容になることに気付いたからである。つまり、この③の文章は、思いつくままに次々と連想の繋がりによって書かれており、その分、内容が飛躍しすぎている。そこで、今度はそれぞれの内容ごとに独立させて、よりまとまりをもったひとつずつの文章として書き直そうとするのである。それが、④以下の文章である。なお、この部分にも徒然草の影響は顕著で、第19段の新年の描写と類似している。

④は、③の最初の部分を独立させたものである。「春雨」を、単に「雨」と直している。

⑤は、③の最後の部分を書き直したものである。④で過去と現在の違いを指摘したのと対照させて、ここでは、過去から現在まで変わらぬものを示そうとする。ただし、この文章は途中で止めており、全集の脚注によれば、「まだ明けはてぬほどに衣にくゝまりてふしたるに、大路行人のあし音の門」という表現には削除の跡があり、すぐ後に⑥が続けて書かれているとのことである。

⑥は、したがって⑤の書き出しの「年たつ日のさまこそなる物なうをかし。これのみはさもかはらざりけり。」を冒頭部として、その後「<sup>(マア)</sup>朝ごとに松たて渡して」と元旦の街の様子がつづき、新年から三月ごろまでの日常生活を描く小品として完成し、首尾が一貫している。このように⑥は、季節を連続的にとらえる構想や、「松たて渡して大路のさまもあらたまりて」という表現などに徒然草第19段の明らかな影響が見られる。ただし、そのような中でも、「いかのぼりこそいさましき物なれ。おの子ならましかばと時々思はるゝや」という部分などには、一葉の率直な感想が述べられており、注目される。一葉は子供の頃から英雄豪傑の登場する草双紙を好み、前述した『身のふる衣 まきのいち』でも活発な行動性が描かれていたように、本来男性的な性格だったようである。「おの子ならましかば」という無邪気な願いは、しかしながら後年次第に女性としての立場への無力感や挫折感に転換し、それが一葉の文学を生み出す原動力となり、また最大のテーマとなってゆくのである。なお、「すご六もよし。すべてすべて勝負ある物をかし」という部分にも、一葉のはっきりとした強い性格がよく表れているが、このようなことは徒然草ではむしろ否定されていることで、兼好は勝負事を戒めている<sup>5)</sup>。新年から二月にかけて、いつのまにか月日が過ぎて行くことを書いたあたりは、時間の推移の不思議さが的確にとらえられている。そして、それに続けて、春になるのは実際には二月からで、旧暦と違うということを書き、③の中間部に書いていたことを、この部分に復活させている。文章の流れとしてここに持ってきたのは成功しており、自然な展開となっている。

以上①から⑥の文章を順次見て行くことによって、一葉がどのようにして文章の表現や構想を推敲しているか、その一端がわかったように思う。一葉は、次々に心に浮かんでくるさまざまなことを書き留め、その後もう一度読み直して、内容のまとまりを見極め、新

たな文章として書き直している。その際に、順序を入れ替えたり、表現を多少変えたりはするが、最初のをなるべく生かす形をとっており、自分の心を大切に育んでいる姿が表れているように感じられる。そしてそのような姿勢自体は、徒然草の序段で兼好が、「心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば」と述べていることと通じるのではないか。自分自身の心というものを、いかにしてその生まれたままの姿を尊重しながら、次第に彫琢を深め、文学性を高めてゆくか。一葉と兼好に共通する文学姿勢である。

#### (4) 明治22年夏の雑記

この雑記は、人間の願望を描く徒然草第1段と非常に関係がある。ただし、徒然草では男性貴族の理想像が書かれているのに対して、一葉は、現実の女性のあり方を凝視した上で書いている。ここでも一葉は、(3)の⑥で書いていたように、女性に生まれたことのつまらなさを述べている。次にこの雑記の全文を示そう。

夫、人の世に生まれて、願はしかるべきことこそ、いと多けれ。かみはかけまくもかしこき御あたり、久方雲のうへより、下はたきゝこる山がつまで、物たれりと思ひなんや。されどすべて、かねて思ひ置きしことの半にもならず、身を終る者のみぞ多けれ。まして女の身、はたいふかひなく口をしき者はあらじかし。生て出て六ツ迄は、おのことも別ちなけれど、其女や今少しおとなび行て、物ごと学ぶにも、男よりはことわりわきがたく、まだかたはしだにもしらぬまに、たちぬひのわざなすべく成りぬ。上りたるきは人さしもあらざめれど、十五六に成ては、まして物学びに行くべくもあらず、人のいはんこと、はたくるし。されどこれのみは今様かはり多けれ。くれ竹のよに一ふし高くなど思はざらんこそよけれ。小説などかくもよけれど、若き人はそれも又面起す業にもあらず。もはらなどいふ学、猶うしろめたし。哀、おのこならましかば、とかこつも有べし。

冒頭部は、徒然草第1段、「いでや、この世に生まれては、願はしかるべき事こそ多かめれ」に依っている。続いて、人間の願望には限りがなく、どのような身分の人であっても、自分の現状に満足していないであろう、という部分は徒然草には見られず、一葉独自の考えが示されている。ただし、まず身分が高い人を問題にしているのは、徒然草で、「御門の御位は、いともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき」と書かれているのと対応している。兼好は宮中に仕え、天皇や上流貴族と接する機会があったが、一葉も「菽の舎」において当時の貴族令嬢たちと間近に接していたので、「かみはかけまくもかしこき御あたり久方雲のうへ」の人々は、決して徒然草の表現を踏襲しただけではなく、一葉自身の実感でもあったろう。けれどもそのような人々でさえ、「物たれりと思ひなんや」と見抜いているところに、一葉の並み並みならぬ洞察力が感じられるのである。そして、「されどすべてかねて思ひ置きしことの半にもならず身を終る者のみぞ多けれ」という一文には、現実と願望と懸け離れたものであることがすでに明確に認識されている。ここは、徒然草第188段とやや似ているが、それに依ったというよりもむしろ、一葉が、両親や兄弟など身近な人々の人生から教えられたことかもしれない。

この雑記において特に注目すべきは、次の部分からである。徒然草では、「法師ばかりうらやましからぬものはあらじ」として、人間の中で法師であることつまらなさを述べる展開になっているが、そのような徒然草の文章の流れに沿う形をとりながら、一葉は、

自分独自の問題意識をここから展開してゆくのである。すなわち、一葉は、徒然草の「法師」を「女」に入れ替え、女性に生まれた者が、男性と比べていかに不利な人生を送らざるを得ないか、ということを書いてゆく。上流階級はいざしらず、世間一般の女性は、たとえ学問をしたくても上級の学校へ進むことが難しく、自分の進路を自分で選ぶ年齢以前に、「たちぬひのわざ」つまり裁縫を習わされたりして、学問と無縁になってしまう、と嘆いている。この嘆きはまさに一葉自身の体験に基づくものであった。一葉は、小学校に4年通学しただけで、それ以後は学校に行っておらず、「たちぬひのわざ」を習わされている。最後の部分で、女性に生まれた以上、世間で頭角を現そうとしたり、小説を書いたり、学問に専念しようなどと望むのはとても無理なことである、とは書いているが、このようなことこそ実は、一葉が心の奥で密かに抱いていた願望だったのである。「哀、おのこならましかばとかこつも有べし」とまるで他人のこのように末尾の文章を結んでいるが、「おのこならましかば」とは、一葉のかなわぬ願ひであった。

この雑記は、徒然草第1段に依りながらも、一葉自身の率直な思いが吐露されており、一葉の心情が、徒然草という媒介を得て、開花していることがわかる。そして、この一葉の文章と比べると、兼好の場合は、当時の男性貴族の理想像を書いている、それはあくまでも兼好が他人事として書いていることに改めて気付かされる。つまり、兼好は決して自分自身の願望を書いているのではない。一方、一葉の関心は真っすぐに自分に向けられている。先に、一葉と兼好の執筆姿勢の類似性を指摘したが、ふたりの視線の方向は対照的であり、兼好の視線は自己の外部に向かって開き、一葉の視線は自己の内部に向かって開いていると言えよう。

#### 4. 父の死前後の一葉と徒然草

ここで、これまで見てきた一葉の文章中における徒然草との関わりを、もう一度振り返ってみよう。徒然草の章段で明確に引用されていたのは、序段・第1段・第13段・第19段である。それらの引用は徒然草の冒頭部に集中しており、兼好の人間観・読書観・季節感をひとつの規範としながら、一葉自身の考えを述べる方法が取られていた。このことは、ある意味では、徒然草という古典を知識として利用しながら書いている、とも言える態度であり、この段階ではまだ、徒然草に対する心からの共感を感じられないのである。ところが、先にも一言触れた明治23年3月14日の日記の余白に書き込まれている断片あたりから、一葉の内部で徒然草の持つ意味が、少しずつ変質してきているように思われる。まず、この余白断片をみてみよう。

世の中の事程しれ難き物はあらかじかし。必ずなど頼めたる事も、大方は違ひぬさえひたぶるに違ふかとすれば、又さもなかりけり。いかにしていかにかせまし。唯物の成行を見てこそ、頼つめやなん頼つめやなん

浮草の根を絶たるがごと、青柳のかぜになびくがごと、みさほなきこそ、世は安けれ。

この前半の部分は、明らかに徒然草第189段によっている。

今日はその事をなさんと思へど、あらぬ急ぎ先づ出で来て紛れ暮らし、待つ人は障

りありて、頼めぬ人は来たり。頼みたる方の事は違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりは叶ひぬ。煩はしかりつる事はことなくて、易かるべき事はいと心苦し。日々に過ぎ行くさま、かねて思ひつるには似ず。一年の中もかくの如し。一生の間もしかなり。かねてのあらまし、皆違ひ行くかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよいよ物は定め難し。不定と心得ぬるのみ、実にて違はず。

この徒然草の表現と比べてみると、一葉が第189段の主旨を簡潔にまとめて書いていることがわかる。徒然草そのままの引用ではないところにかえて、一読して強く心に刻み込まれた内容を、その後ある状況の下で、自分なりに咀嚼してここに書き留めたことが示されている。今まで一葉は、徒然草の冒頭部しか引用していなかったにもかかわらず、ここでは、徒然草の後半部に書かれているこの世の真実に深く触れる兼好の思想に共鳴しているのはなぜだろうか。それはおそらく、当時の一葉の境遇の変化と連動していよう。

一葉は、『身のふる衣 まきのいち』のなかで、自分が「萩の舎」に集まる他の女性たちと比べて、家が貧しいことをかなり誇張して書いていた。実際「萩の舎」には華族の令嬢や貴婦人たちがひしめいていたのであるから、確かにそれは、一葉の実感だったのであろう。しかし、一步家に帰れば、当時の樋口家はまだそれほど困窮していたわけではなかったという。けれども、事業に失敗した父則義が、明治22年7月12日に病没した前後からは、文字通り一葉の一家は困窮する。そのような経済的没落と父の死を経て、それまでのような家族の庇護の下に、世間の荒波を遮断されて安穏とした暮らしを送っていた一葉も、急速に否応なく外部の世界と対峙せざるをえなくなる。さらに、生前父が一葉との結婚を望んでいた同郷の青年渋谷三郎が、則義の死後は、樋口家から自然に足が遠のいてしまい、その結婚話も消滅してしまった。このようなさまざまな状況を踏まえて、一葉は、「世の中の事程しれ難き物はあらじかし」と書いたのである。そしてその時、徒然草は一葉にとって、単なる古典文学ではなく、まさに自分自身の心境の代弁者をその中に発見したのであろう。これ以後の一葉の日記や雑記、文学作品のなかに徒然草が、重要な地位を占めてくるのも、一葉の人生体験の深まりと密接に関係することが読み取れるのである。もちろん徒然草の短い表現や特に有名な箇所も引用されてゆくが、より深く兼好の思想とかわる章段への関心が高まり、一葉の著作に思索の厚みを生み出す源泉のひとつとなってくる。本稿の最初に述べた、徒然草に対する平田秃木との一致点も、この時期からすでに一葉の内部で生まれていたものであったと言えよう。

## 5. 『若葉かげ』の構想と表現

『若葉かげ』は、明治24年4月11日から明治24年6月24日まで、約2ヶ月間にわたって書かれた日記である。一葉の最初の日記である『身のふる衣 まきのいち』が、「萩の舎」での出来事を中心にして、ほぼ土曜日の稽古日毎に書かれていたのに対して、この『若葉かげ』においては、「萩の舎」の比重は小さくなっており、半井桃水との出会いと、小説の執筆が中心となって、述べ30日以上、平均して一日置きに書かれている。また、この日記には、序文と跋文が付けられているが、それらが、徒然草によっていることが、注目される。

一葉と徒然草のかかわりについては、『身のふる衣 まきのいち』の段階ではまだそれほど徒然草が重要な役割を果たしていなかったが、その後、父の死を経て、一葉の環境が一変したところから、次第に徒然草への深い理解が現れ、それが、雑記などの中に残されているのを前節までに見てきた。『若葉かげ』に至っては、徒然草の存在が、序文と跋文に使われるほど大きくなっている。つまり、『若葉かげ』は4月11日の墨田川の花見から起筆されているが、その前に序文と自作の和歌一首が書かれている。そして、最後の6月24日は日付だけしか書かれていないが、この2ヶ月間の日記をひとまとまりのものとして区切りを付けるにあたって、短い跋文と自作の俳句一句を掲げている。この序文と跋文を以下に示してみよう。

『若葉かげ』序文

花にあくがれ月にかがぶ折々のころ、をかしきもまれにはあり。おもふこといはずらむは、腹ふくるゝてふたとへも侍れば、おのが心にうれしともかなしともおもひあまりたるをもらすになん。さるはもとより世の人にみすべきものならねば、ふでに花なく、文に艶なし。たゞ其折々を、おのづからなるから、あるはあながちにひとりほめして、今更におもなきもあり、無下にいやしうてもものわらひなるも多かり。名のみことごとしう若葉かげなどいふものから、行末しげれの祝ひ心には侍らずかし。

卯のはなのうきよの中のうれたさに

おのれ若葉のかげにこそすめ

『若葉かげ』跋文

究竟は理即到ひとしとぞきく。入りなんとする昔しの迷ひと、覚めはてぬる後の悟とそれ大方は似たるべし。此わか葉かげ、そも迷夢のはじめか、悟道のしをりか。かれ木の後に見る人あらばとて、

なほしげれ くらくなるとも 一木立

まず、序文の2ヶ所の下線部は、徒然草第19段の、「おほしき事言はぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず」によっていることは、明らかである。第19段のこの部分は、兼好が、徒然草を執筆する過程で、執筆行為そのものに自覚的になったことを示す重要な部分である。その箇所を一葉が序文に使っているのは、一葉もこれから書く日記に対して最初からかなり明確な執筆意識を持って書き進めてゆく決意を表しているためと見てよいだろう。これほど明確な序文を持つ一葉の日記は、他に見られないので、この日記を起筆するにあたって一葉が、いかに力を込めていたかがわかる。なお、この序文では、徒然草以外にも、『古今和歌集』の仮名序や『源氏物語』の帯木巻などの表現も彷彿とさせ、一葉の古典文学の知識が駆使されている。

序文に付されている和歌は、「う」音の繰り返しのリズム感、卯の花の白と若葉の緑の清冽な色彩感、「住む」と「澄む」の掛詞など、表現面で優れた和歌となっている。また、内容的には一葉の隠遁的志向が表明されているが、これなども、徒然草に表されている兼好の志向と重なるものがある。ただし、この日記の題名の『若葉かげ』を「杜鵑に寄せた厭世的で逃避的な情緒の象徴である」とする解釈があり<sup>9)</sup>、それはおそらくこの和歌をそ

のように解釈したところから生じていると思われるが、歌自体の意味としては、決して単に厭世的で逃避的なものではなく、むしろ、世間の汚濁に染まらずに生きていこうとする積極的な姿勢を感じる。

跋文の下線部は、徒然草第217段の末尾の「究竟は理即到等し」によっている。第217段は、ある大福長者が富豪になる秘訣を説く段で、最後に長者の金銭観に対する兼好の感想が付されており、その部分にこの仏教思想が書かれている。「究竟は理即到等し」とは、迷いを脱していない状態の「理即到」も、悟りを開いた境地の「究竟」も結局は同じことであるという意味である。一葉は、この意味を踏まえて、「このわか葉かげ、そも迷夢のはじめか、悟道のしをりか」と書いているのである。徒然草の内容をよく理解した上で、日記のしめくりとしている。ここで一葉は、徒然草の表現に導かれて「迷夢」と「悟道」という両極の言葉を出しているが、一葉の精神世界のあり方は、今後もこの両極を大きく揺れ続け、文学に対しても、半井桃水に対しても迷いと悟りを繰り返しながら、自己の十全な開花を求めて苦悩するのである。しかし、この時点ですで一葉自身は、迷いも悟りも結局は同じことであると、徒然草を通して知識としては知っているわけであり、一葉に課せられたものは、今後の人生の軌跡の上で、いかにしてこのことを真の自己認識として高めてゆくかということであろう。だからこそ、一葉は、「なほしげれ くらくなるとも 一木立」という一句を最後に付して、自らの文運を予祝したのである。この句には、たとえそれが暗鬱なものとなったとしても、文学的真実を書いていこうとする一葉の文学者としての姿が、見事に象られている。

こうして、序文と跋文を読んでみると、一葉が、徒然草によってこの日記の枠組を成り立たせていることがわかるが、次に、具体的な日記の内容の中で徒然草がどのように使われているか、簡単に触れておきたい。

一葉の最初の日記『身のふる衣 まきのいち』において、日記の記述に粗密があることは、前述したが、この『若葉かげ』でも同様のことが言える。『若葉かげ』で特に詳しく書かれているのは、4月11日の墨田川の花見、一連の半井桃水との対面、「萩の舎」での男女の年齢比べである。この日記の書き始めの墨田川の花見は、「萩の舎」の世界が場所を移動しただけで、内容的には、『身のふる衣 まきのいち』で一葉が描いていた世界の延長線上にある。しかし、気をつけて読んでみると、『身のふる衣 まきのいち』の「萩の舎」発会と植物園散策が、どちらも一葉の姿を中心にしてかなり主観的に描かれていたのに対して、墨田川の花見の記述は、より一層情景描写に重点が置かれている。また、一日の記述の前半には妹と連れ立っての散策、後半には吉田かとり子邸での花見の宴を書き、日常世界から非日常的な華やかで優雅な古典の世界への自然な移行が描かれ、時間的・空間的な広がり構成の巧みさが発揮され、文学的発展の跡が見出される。

この墨田川花見の日記には、徒然草からの引用が見出されるので、次に示してみよう。

卯月十一日 吉田かとり子ぬしの澄田河の家に、花見の宴に招かる、日也。友なる人々は、師の君のがりつどひて、共に行給ふもおはしき。おのれは妹のたれこめのみ居て、春の風にもあたらぬがうれたければ、いでやともに、などそゝのかして誘ひ出ぬ。花ぐもりとかいふらんやうに、少し空打霞みて、日のかげのけざやかならぬもいとよし。上野の岡はさかり過ぬとか聞つれど、花は盛りに月はくまなきをのみ愛るも

のかは、いでやその散がたの木かげこそをかしからめ、といへば、ならびが岡の法師のまねびにや、といもうとなる人は、打ゑみぬ。さすがに面なくて、得いわず成ぬるもをかし。

最初の下線部は、原典は、『古今和歌集』の藤原因香の「垂れこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし桜もうつろひにけり」であるが、直接には徒然草第137段の「垂れこめて春のゆくへ知らぬもなほ、あはれに情け深し」によると思われる。また、2番目の下線部も同じ箇所、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春のゆくへ知らぬもなほ、あはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所多けれ。」による。ここでは、桜の花の開花状況をめぐって、徒然草が日常会話の中に自然に使われており、一葉の妹の邦子にとっても徒然草のこの部分は親しみ深いものであったことが、よく表されている。

さらに、この日の日記の終わりの方で、花見の宴も果てて、人々が帰路に着くあたりの「やうやう日の暮行くまゝにそれらの人(酔客)は、かげもとゞめず也にたれば、今は心安しとて、花の木かげたちめぐり、おのがじしざれかはすほどに、いつしか名残なく暮れはて、川の面をのみ見渡せば、水上は、しろき衣を引きたるやうに霞みて、向ひのきしの火かげばかりかすかにみゆるも哀也。」という夕暮れの描写には、徒然草第137段の葵祭りの場面、「暮るゝほどには、立て並べつる車ども、所なく並みあつる人も、いづかたへか行きつらん、程なく稀になりて、車どものらうがはしさも済みぬれば、簾、畳も取り払ひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。」と相通じるものが感じられる。4月11日の日記で徒然草と関連があるのは、以上の箇所である。一葉の日常体験の中に徒然草が深く浸透しており、体験を記す場合にも、徒然草の美意識や価値観が強く反映していることがわかる。

## 6. おわりに

『若葉かげ』では、徒然草以外の古典として、『源氏物語』の引用がかなりみられ、それは半井桃水との対面を書く部分にも出てくる。しかし、徒然草に直接関係がある表現は序文と跋文と4月11日にしかみられない。桃水のことを書いた部分には、残念ながら徒然草の引用はみあたらない。それは、おそらく「萩の舎」的な世界こそ王朝古典文学と密接に結び付いていること、また、半井桃水を理想的なすばらしい男性像として描くにあたっては、自然と光源氏的なイメージとなること、などによると思われる。それらの場面で徒然草が引用されていないという事実が、逆に一葉の内部世界における徒然草の役割を明確に浮かび上がらせている。すなわちこの時期あたりから以後、徒然草の存在は一葉にとって、「萩の舎」や桃水とは違ったもうひとつの、より現実的なこの世のあり方や一葉自身の生き方と深くかかわってくるのである。

以上みてきたように、樋口一葉の書き残した日記・作品・断片などの中に、徒然草という特定の作品とのかかわりを追跡してゆくことによって、一葉の文学的な変貌に光を当てることができる。このような作業の有効性は、徒然草に照準を当てることに限らないであらうし、より多くの他の作品との関連性を一葉文学の中に見出すことによってより精密

なものとなろう。本稿では、初期の日記や習作を取り上げて、明治24年までの一葉の姿を徒然草とのかかわりの中から考察してみた。それ以後については別稿に譲りたい。

## 注

- 1) 樋口一葉の雑記・日記・習作などはすべて、筑摩書房『樋口一葉全集』によった。ただし、私意に句読点を付し、表記を改めた箇所もある。なお、この部分の「つれづれの法師を慕ふ人」の解釈として、山根賢吉氏は「一葉の日記と徒然草」(大阪教育大学『学大國文』第11号・1968)において、「一葉自身と見なすこともできよう」とされるが、これは一葉ではなく、平田禿木のことを指すことは明らかである。同論文は、晩年に至るまでの一葉の日記から、徒然草との関連箇所を40箇所近く指摘しているが、本稿では、徒然草の表現との関連の指摘よりむしろ、徒然草が一葉の文学的変貌の中で果たした役割に重点を置いて考察した。
- 2) この日の記述にある「八丈のなへばみたる衣一重」「此人々のあやにしき着給ひしよりはわがふる衣こそ中々たらちねの親の志」などという表現によって、日記の題が名付けられている。
- 3) この時の一葉の和歌は、「月前柳 打ちなびくやなぎを見ればのどかなるおぼろ月夜も風は有けり」であった。
- 4) 「つれづれ」と「雨」が結び付いて詠まれている和歌としては、たとえば「つれづれのながめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし」(『古今和歌集』巻13・恋3・617・藤原敏行。『伊勢物語』にもあり)や、「ながめするみどりの空もかきくもりつれづれまさる春雨ぞふる」(『玉葉和歌集』巻1・春上・102・藤原俊成)などがある。
- 5) 徒然草第111段・第130段などに書かれている。
- 6) 『樋口一葉全集』第3巻(上)36ページの補注にみられる説。

(平成3年11月13日受理)